



「ニィちゃん、はじめてだよね」

～シゲちゃんの挑戦～

余 川 達 也

白老の牧場にいるシゲちゃん、私の大切な友人です。彼のことを、私が所属する(公社)日本技術士会の登録グループ「畜産技術士センター」の会報で紹介したところ、会員のみなさんから大きな反響をいただきました。彼のことをもっと多くのみなさんに知っていただきたくて、同センターの許可を得た上、ここに転載させていただきます。

本稿は、2014年(平成26年)10月発行の「畜産技術士センターだより No.25」に投稿したものが、本年3月発行の「畜産技術士センター会報 69号」に登載されたものです。

以下、本文です。

「ニィちゃん、はじめてだよね」

～シゲちゃんの挑戦～

【石山 繁】

競馬ファンの方なら、この名前をよく憶えておられるかもしれません。そして、
《中央競馬の平地・障害双方で活躍し、重賞2勝を挙げ、若手ホープとして将来を嘱望されていたにもかかわらず、落馬事故によって引退を余儀なくされた、悲運の騎手》

といったプロフィールも。

しかしながら、このプロフィール、これで終わらせるわけにはいきません。「その後」は現在進行形なのです。

馬主さんに「シゲちゃん」と名付けてもらったという石山さんは、競馬学校の11期生で、平成7年に中央競馬の平地レースでデビューしました。その後、障害レースにも騎乗する二刀流となり、その実力と端正な容姿から競馬ファンの人気を集めていきます。重賞は、平成12年の「報知杯4歳牝馬特別」、17年の「小倉サマージャンプ」を勝っており、12年の報知杯を勝った勢いで、同年の桜花賞では1番人気となっています。このときは4着に終わりましたが、その後も勝ち鞍を重ね、人気騎手としての地位を固めていきました。

ところが、平成19年2月、阪神競馬場で行われた障害レースで落馬、頭部を強打して脳に挫傷を負い、一時は生死の境をさまようこととなります。その強靱な体力から奇跡的に意識を取り戻したシゲちゃんは、競馬に対する強い思いもあって、現役復帰を目指してリハビリとトレーニングに励みました。しかしながら、脳が受けた傷は重く、後遺症として視力の低下が著しかったことから、復帰の夢は叶うことなく、引退せざるを得ませんでした。今から5年前、平成21年2月のことです。

と、ここまでが、よく知られているシゲちゃんのプロフィールの詳細です。

シゲちゃんの背負った後遺症、病名は「高次脳機能障害」といいます。

映画にもなった小川洋子さんの小説「博士の愛した数式」をご存じでしょうか。作品の主人公は過去に遭った交通事故により、記憶に障害を残しています。ここに描かれているのが、まさに高次脳機能障害の典型的なひとつの症状なのです。

書中、この主人公は記憶が 80 分しかもたないということが記されており、小説の上でのフィクションのように思っていました。しかし、今年の春、私はシゲちゃんとお会ったことで、これが現実にあることだと思い知らされたのです。



シゲちゃんとは、白老町にある牧場で会うことになりました。

札幌から室蘭に転勤になった私は、好きな乗馬を続けたくて通うことができるクラブを探していたところ、この牧場に行き着きました。馬主から引退馬の預託を受けて飼養する「養老牧場」が本業ですが、小規模ながら乗馬のレッスンも行っています。牧場のオーナーは秋田政司さんといい、馬術の世界ではかなり名の通った方です。

私はこの牧場の門をたたき、練習生としてお世話になることになりました。そこにいたのが、シゲちゃんだったのです。

シゲちゃんは、騎手生命を絶たれて道に迷っていたところ、障害者乗馬に造詣が深い秋田さんに声をかけられ、馬術競技の道を勧められたのだそうです。障害を負ったとはいえ、馬に乗る技術やセンスは折り紙付き。がんばってパラリンピックを目指そう、と。

今は牧場の仕事をしながら、練習を重ねています。

シゲちゃんの記憶は、小説のように 80 分きっかりで消えてしまうというわけではありません。すぐに消えることもあれば、ずっと残ることもあるようです。記憶の残り方もまちまちだと。また、年月の流れや前後関係を把握しにくくなっているように感じます。今でこそ見ていていい状態に感じられますが、リハビリを行っていた当時は、想像を絶する苦労があったとも聞きます。

初めて会ったとき、シゲちゃんから「ニィちゃん、はじめてだよ？」と言われました。後から思えば、これは彼一流の挨拶のことばだったのです。もち

ろそのときは、「はじめてだよ。余川です。よろしくお願いします。」と当たり前に戻し、シゲちゃんの人なつっこい笑顔にすぐに打ち解けたものでした。

シゲちゃんは私といっしょに馬装をしながら、自分は元騎手の石山繁で、フミノトキメキで小倉の重賞ジャンプを勝ったこと、サイコーキララで桜花賞の 1 番人気になったものの、気負いすぎて勝てなかったのが未だに悔しいこと、落馬して頭に大けがをして引退したこと、それにあんなことやこんなこと、いろいろ話してくれました。

『……石山繁、もちろん知ってるよ、引退したところまでは。こんなところで本人に会えるとは思ってもみなかった。』

いっしょにいた先輩練習生の方がシゲちゃんの障碍のことも教えてくれましたが、彼と話していても、そんな障碍があることはぜんぜん感じられませんでした。ただその方は、「次にきたときには、顔も名前も忘れてるかもしれないよ。病気のせいだから、気にしないであげてね。」と言ってくれました。

そして 2 週間空けて次に会ったとき、シゲちゃんの挨拶はこうでした。

「ニィちゃん、はじめてだよ？」

シゲちゃんの負った障碍のことは、知識としては仕込んでいました。しかし、やはりそれを目の当たりにすると、少なからずショックを感じてしまいました。ただ、話をしているうちにすぐに前回のことを思い出したようです。どうやら、私は印象に残りやすい人間だったみたいです。

シゲちゃんは底抜けに明るい。たぶん、これは昔から変わっていないのでしょう。現役時代、騎手仲間と京都の街を飲み歩いたこと、最盛期には稼ぎが 4 ケタもあったこと、サインしてやろうか、等々、楽しそうに話してくれます。明るいだけでなく、軽くヘンタイで、適度に悪党でもあります。私と同じです。

ただ、私が馬にまたがったとき、シゲちゃんの見つきは違うものになりました。プロの目です。中央の騎手が馬を見る目、です。そんなシビアな目を見ながらも、シゲちゃんは自らの経験からいろいろア

ドバイスしてくれます。いや、他人にアドバイスするというより、自分が悩み迷っている部分を私に照らし、自らに言い聞かせているようにも感じられました。

シゲちゃんのライディングは、さすがに隙が感じられないものです。実戦の競馬を経験しているから当然といえば当然ですが、彼は後遺症により、視力と筋力の低下に苦しんでいるのです。特に、視力の低下は、シゲちゃんが現役を引退しなければならなくなった直接の原因でもあるので、気持ちに影響する部分も大きいでしょう。また、シゲちゃんの乗り方は、競馬の「それ」です。向こう正面では折り合いをつけながらペースを作り、4 コーナーを出たところから一気に追う、「あれ」が染みついているのです。「競馬」から「馬術」に修正していくことは、私のような初級者を鍛えるのと同じくらい難しいのかもしれない。

さらに、シゲちゃんには記憶の障害が重くのしかかっています。馬場馬術の競技は、決められた経路を正確にたどることがまず求められるのですが、この経路を憶えるのが彼にとってはたいへん難しい。いつも経路図を片手に、必死に憶えようと努力しているのがわかります。

それでも、いっしょに練習していて、うれしいことがありました。シゲちゃんは視力がかなり落ちていて、経路を憶えようと馬場を歩いてたどっているときは、設置されているマーカー（A、B、C～と書かれた表示板）がほとんど見えていません。ところが、練習を重ねているうちに、地面に立って見えていなかったマーカーが、馬上からなら少し見えるようになってきたといいます。そのことを話してくれたときのうれしそうな顔、忘れられません。

シゲちゃんがうれしくなると、牧場のみんなもうれしくなります。ひとつ乗り越えたときのシゲちゃんの笑顔は、そばにいるみんなを同じ気持ちにさせてくれるのです。

そんなシゲちゃんと同じ時間を過ごせることが、私にとってかけがえのないものになっています。い

まだに、「ニィちゃん、はじめてだよね?」とくる日もありますが、行くとたびに新しい出会いがあると思えば、お互いに儲けもんなのです。

10 月には、シゲちゃんは台湾で開催される障害者の馬術大会に出場することになっています。来春にも、道内での大会に参加する予定です。これからどんどん場数を踏んで、ステップを上げていくことになるでしょう。

私ももちろん、牛歩ではありますが、一段一段上を目指していくつもりです。元プロの騎手と馬で張り合おうなど、あまりにおこがましいことだとは思いますが、毎度心地よい刺激をもらってばかりでは申し訳ないので、ほんのわずかでも刺激を返していきたいと思っています。



牧場の休憩室には、シゲちゃんが小倉サマージャンプで勝ったときの写真が飾ってあります。でも、これは決して過去の栄光ではありません。現在進行形の「その後」を彩るための、ちょっとしたスパイスであると思っています。そして、次の写真が飾られるとき、シゲちゃんの新しい栄光の道が開けるとともに、プロフィールのうしろに新たな一文が記されると、私は信じています。もちろん、「悲運の」なんて入っていない一文が。



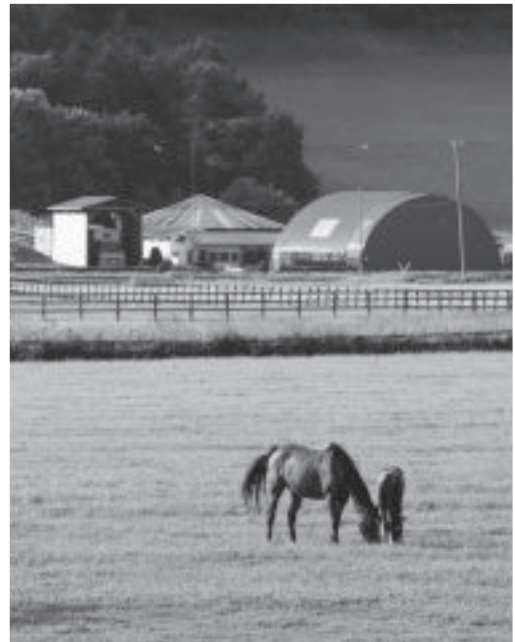
【後日譚】

畜産技術士センターだよりが発行された直後の 2014 年(平成 26 年)10 月、シゲちゃんは島根県で開催された全国障がい者馬術大会で 3 種目にエントリーし、3 種目とも優勝しました。うち 2 種目は、本人としては決して満足のいく演技ではなかったので悔しさもあったようですが、1 種目は納得いく演技ができて、表彰式で男泣きしたそうです。

その勢いのまま翌週に台湾で開催された国際大会に乗り込み、個人で 3 位、またシゲちゃんの活躍が光って国別団体でも日本が 3 位と、大金星を挙げて帰ってきました。

ただ、道内ではこのことがマスコミに取り上げられることはなかったため、私はセンターだよりのコピーを持って北海道新聞の苫小牧支社に赴き、「この男に光を当ててほしい」とお願いしたところ、すぐに取材に行って全道版の記事(2014 年(平成 26 年)10 月 28 日付け朝刊)にしてくれました。あとで記者の方に話を伺うと、「応援団が増えれば、という気持ちで書いた」と言ってくださいました。ありがたいことです。

今年に入って、「ニィチャン、はじめてだよね?」とくることはほとんどなくなりました。少しずつ、少しずつ前に向かっていくことを実感しています。私も微力ですが、ひとり、またひとりと、シゲちゃんの応援団を増やしていきたいと考えています。



余 川 達 也 (よかわ たつや)

技術士(農業部門)

北海道胆振総合振興局

